

# Shikano Art Festival Archive 2016 - 2022



鹿野芸術祭実行委員会

風景を紡ぐ人たち

制作：2024年11月 鹿野芸術祭実行委員会

発行：一般社団法人鳥取クリエイティブプラットフォーム

鹿野芸術祭に関わってくださる全ての皆様に感謝をこめて。





鳥取の小さな城下町で、  
その小さな芸術祭は始まりました。  
とりあえず一回だけやってみよう、  
というつもりで開催されたこの芸術祭は  
人と人がつながり、  
新しい人がやって来て、  
変化しながら少しずつ大きくなっていきました。

それはまるで新しい風景の糸を  
さまざまな人が紡いでいき、  
やがてひとつの大きな作品が  
できあがるように  
作り上げてられていきました。

鹿野には昔から続く城下の町並みが  
今も残されています。  
それはこの町に住む人たちが世代を越えて  
ずっと守り続けてきたものです。  
その脈々と受け継がれてきた町並みの上に  
アートがどんな新しい風景を紡いだのか。  
どんな人々がやって来て新たな作品が生まれ、  
その想いが受け継がれていったのか。  
7年にわたる長い物語がいま幕を開けます。



## 2016 鹿野芸術祭 00

始まりは鹿野町にある「まちづくり協議会」の小林清さんのふとした  
思いつきでした。「そうだ、鹿野で芸術祭をやってみよう」  
鹿野町はもともと町おこしが盛んな地域で町民ミュージカルが開催されたり、  
かつての小学校を利用して劇団「鳥の劇場」が活動していたりと  
文化的なものを受け入れる風土がありました。  
そんな鹿野町にドイツから藤田美希子さんという画家の女性に移住してきます。  
この子に芸術祭をやってもらったらどうだろう。  
そう考えた小林さんは藤田さんに声をかけました。  
思いついたらなんでもやってみよう。それがまちづくり協議会のモットーなのです。  
そして記念すべき第一回目の鹿野芸術祭は開催されることになりました。

小さな城下町に  
ひとりの女性に移り住んできた。



# 2016 鹿野芸術祭 00

芸術祭を  
作る人

芸術祭実行委員会 藤田美希子



## Profile

千葉県生まれ 多摩美術大学絵画学科油画卒業  
ミュンヘン造形芸術大学卒業  
ポローニャ国際絵本原画展入選  
2016年に鳥取県鹿野町へ移住  
鳥取を中心に絵画の制作発表を行う  
活版工房がついたポストカード店「月夜繪葉書店」を開く

## そして芸術祭ははじまった

私は千葉で生まれて東京の美術大学を出てドイツに絵の勉強に行きました。そろそろ日本に帰ろうと思っていたときに「日本に鹿野っていうおもしろい町があるよ」という話を聞いたんです。昔の小学校をアトリエとして貸し出しているということも聞いて一度行ってみることにしました。たまたま行った日が鹿野祭りという大きなお祭りの日で何となく「私この町に住むかもな」と思ったのを覚えています。

鹿野に移住したばかりの頃、空いた時間によく「まちづくり協議会」に行っておしゃべりしていました。そのとき小林清さんから「鹿野で芸術祭をやってみるか」と声をかけられたんです。なんだか楽しそうだなあと割と気軽に引き受けました。

移住したばかりであまり知り合いもいなかったので人づてにアーティストの人を紹介してもらって、会場をどこにするか考えてチラシを作ったりしました。始めてみると意外と大変で、チラシ配りやアーティストの方たちとの連絡や会場の展示などでヘトヘトになって「これはけっこう大変なことになったぞ」と思いました。それでも鹿野の町のみなさんが助けてくださってなんとか開催まで辿り着けたという感じでした。でも展示された作品を見ながら「初めてやってきた町でなんかおもしろいことができた」と誇らしく思ったことを覚えています。

この年のタイトルは「鹿野芸術祭 00」にしたんです。この「00」というのはまだ一回目になる前のイベントみたいな意味で「とりあえず一回だけやってみます」という気持ちがこもっています。実際にやってみたらすごく大変だったということもあって、もうこの年で終わりにしようと思っていました。芸術祭が終わったあと小林さんにその旨を伝えて、私としてはやり切ったしこの回だけで終了するつもりでいました。

# 2016 鹿野芸術祭 00 Archive Data

開催日 2016年 11/19(土) 20(日) 26(土) 27(日)

展示会場 しかの心/旧田中邸/一心庵/八百屋barものがたり/ゆめ本陣



井上智弘



内山依津花



ひやまちさと



藤田美希子



宮内博史



山本一恵



参加アーティスト

井上智弘 / 写真、モバイルハウス

内山依津花 / 絵画インスタレーション+ビデオインスタレーション

ひやまちさと / 版画、イラストレーション

藤田美希子 / 絵画、絵本

宮内博史 / 絵画

山本一恵 / 絵画

## 2017 鹿野芸術祭 01

一旦、終わるかと思われた鹿野芸術祭。

しかしここで「まちづくり協議会」の小林清さんがひとりの青年に声をかけます。

数年間のドイツでの生活を終えて鹿野でのんびり暮らしていた画家の宮内博史さん。

彼は知り合いのアーティストたちに声をかけ町のさまざまな人たちの

力を借りながら、再び芸術祭の開催へと動きはじめました。

この年は宮内さんのつながりで鳥取県内はもちろん、ドイツやオランダやオーストリア  
など海外出身のアーティストの作品も数多く出展され国際色豊かなものとなりました。

また鹿野では毎年恒例となっている「週末だけのまちのみせ」と同時期に開催され、  
多くの人たちが訪れるアートイベントになりました。

人と人がつながって  
続いていく物語。



# 2017 鹿野芸術祭 01

芸術祭を  
作る人

芸術祭実行委員会 宮内博史



## Profile

- 1986 千葉県銚子市生まれ
- 2009 和光大学表現学部芸術学科卒業
- 2014 空き家を利用した飲食店「八百屋barものがたり」の蔵に居候し、廃校の教室で絵を描く(鳥取・鳥取市)
- 2015 「日本の家」を中心に活動(ドイツ・ライプツィヒ)
- 2016 旧紡績工場群を利用したアート施設「Spinnerrei」の「Halle14」で展示(ドイツ・ライプツィヒ)
- 2016 「Kintai Arts」より招聘(リトアニア・シルーテ)
- 2022 空き家を直してアトリエ「ロクの家」、子供プロジェクト「みかんの家」、ギャラリー「Andecian」を作る(千葉・銚子市)

## アートのバトンをつないでいく

一回目の芸術祭が終わったあと、実行委員だった藤田美希子さんはあまりに大変でもう次の年はやらないと決めていたみたいなんです。そんな時、まちづくり協議会の小林さんに「次の芸術祭をやってくれんか」と声をかけられました。

僕はもともと千葉の出身で鳥取には大工の弟子入りのためにやって来ました。その後、鹿野の「八百屋 bar ものがたり」というお店をしている成瀬くんたちとなかよくなってそこで暮らすようになります。それからドイツに渡って向こうで藤田さんと出会いました。「鹿野っていうおもしろいところがあるよ」といろんな人に言ってたら藤田さんが「じゃあ私も行ってみる」と言い始めて彼女は2016年に鹿野に移住し、僕もそのあと鹿野に戻って暮らしていました。そんな縁もあったし、僕自身ずっと絵を描いてきたということもあってせっかく始まったんだしここで終わるのはもったいないと思い引き受けることにしました。

僕が初めて鹿野に来たとき、この町には独特な空気感があるなあと思いました。時間が止まっているような、どこか別の世界と繋がっているような雰囲気があるんです。まるで異空間に紛れ込んだようなこの町の風土を表現してくれるような作品。そんな作品たちが町のいろんなところに現れて鹿野を訪れた人たちを楽しませてくれたらうれしい。そう思いながらこの年の芸術祭を作っていました。

「八百屋 bar ものがたり」が閉店してしまったあと僕は鹿野を離れてしまいましたが、今でもあの修学旅行みたいだった毎日のことを思い出します。そして今でもみんなが芸術祭を続けてくれていることをとてもうれしく思っています。長いリレーのひとつのバトンをつなげたと思うと、あのときやって本当によかったなあと思うんです。

# 2017 鹿野芸術祭 01

作品を  
作る人

アーティスト 山本晶大



## Profile

高知県出身

尾道市立大学美術学科卒業

ドイツ ベルリンで活動後、現在は岡山に拠点を移し中四国地域を中心に活動中。

建築や映像などを用いたインスタレーション作品のほか、歴史や社会問題をテーマや

モチーフにした現代アート作品などを主に制作。

アートオリンピック 2024 最優秀賞受賞

## 初めての鹿野芸術祭

僕が鹿野芸術祭へ参加したのはこの年が初めてになります。もともとは芸術祭を始めた藤田さんやこの年の実行委員をしていた宮内さんと数年前にドイツのライブツィヒで知り合いになって、それ以来ずっと交流がありました。それから僕は大学が尾道なんです、尾道の「空き家再生プロジェクト」と鹿野の「まちづくり協議会」に繋がりがあったりして、その流れで鹿野に何回か遊びに来たことがあったんです。

2017年もドイツのアーティストたちと鹿野を訪れていてみんなで「てぶら革命」というイベントをやろうという話になったんです。それはもともとドイツの「日本の家」のメンバーたちが向こうでやっていたイベントでその鹿野版をやることになりました。作品展示やワークショップやごはんの会などが開催されてその中で僕も「目目連」というアート作品を展示したんです。その流れで宮内さんに「鹿野芸術祭でも何か出さない？」と声をかけられました。

僕が出展したのは「蔵潰し」という映像作品です。実はこれは2016年に制作したもので文字通り蔵を潰す様子を撮影したものです。昔、鹿野の城下町に「八百屋 bar ものがたり」という飲食店があってその裏庭に倒壊しそうな蔵があったんです。そのオーナーの成瀬さんがその蔵の扱いに困っていたので、成瀬さんのお店の二階に泊めていただいたお礼も兼ねてその蔵の取り壊しをすることになりました。土の壁を叩き壊して側面の貫を部分的に切り出し、最後に柱に括り付けた縄をみんなで引っばって倒壊させました。それまで何十年もその場所で生活の風景の一部となっていた蔵の最後の瞬間。そのプロセスのひとつひとつにもある種の美しさが潜んでいるように僕には感じられました。



作品の動画が  
ご覧いただけます



# 2017 鹿野芸術祭 01

## Archive Data

開催日 2017年 9/9(土) 10(日) 16(土) 17(日) 18(月) 23(土) 24(日)

展示会場 旧鹿野小アトリエ/しかの心2階/旧熊谷邸/旧田中邸/八百屋barものがたり

参加アーティスト

1.ひやまちさと× wakruca/音と空間のインスタレーション 2.杉森康行/絵画

3.美藤康夫/陶芸 4.三谷さやか/染色 5.成瀬望/絵画 6.井上智弘/写真

7.宮内博史/絵画 8.藤田美希子/絵画 9.Gemma Wilson/イラスト

10.Elisabeth Mossbauer/イラスト 11.Franz Iimpler/映像

12.Malwine Stauss/映像 13.Larissa Sharina/映像 14.Elenor Kopka/映像 15.山本晶大/映像

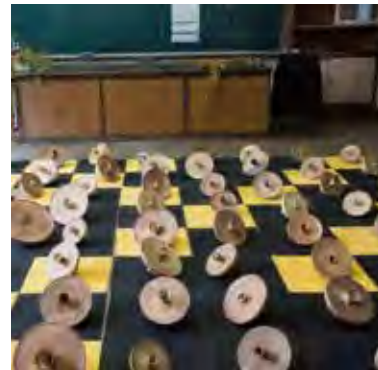
### Artists & Works



1



2



3



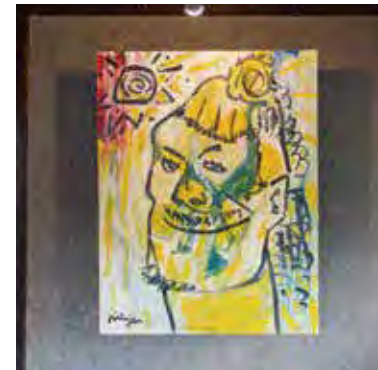
4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15





まだ見たことない  
景色を巡る旅に出よう。

## 2018 鹿野芸術祭 02

Landscape Journey  
～未知の風景をつくる旅～

さて、ここでまた芸術祭に新しい変化が訪れます。  
前回の芸術祭に参加していたイラストレーターのひやまちさとさんが  
「私が次の実行委員をやります」と手を挙げました。  
そして前回の芸術祭でいっしょに作品を作っていた  
コピーライターのwakrucaさんにも声をかけて  
今度は運営側としてに参加することになりました。  
さらに芸術祭を立ち上げた画家の藤田美希子さん、  
城下町に住んでいた山根純子さんも加わり、  
4人体制で芸術祭を運営していくことになりました。  
芸術祭としてのコンセプト作成や、デザイン、  
広報活動などにも力を入れながら、  
よりクオリティの高い芸術祭を目指して動き始めます。

Landscape  
Journey

# 2018 鹿野芸術祭 02

芸術祭を  
作る人

芸術祭実行委員会 wakruca



## Profile

1974年鳥取県生まれ  
東京で20年ほどコピーライターの仕事をしたのち2016年に鳥取に帰郷。  
コピーライター業やイベントでのコーヒー出店をしながら言葉やビジュアル、音楽を使った新しい表現を模索中。

## 「Landscape Journey」 というコンセプト

僕は前年の2017年に芸術祭でひやまさんといっしょに「うまれるまえのへや」というインスタレーション作品を作って発表しました。その流れで、今年は実行委員として運営をいっしょにやりませんか？と声をかけていただいたんです。僕はずっとコピーライターの仕事をしていたので、芸術祭の企画やコピーを考えるのはおもしろそうだなと思って参加してみることにしました。

まず初めにやったのは、今回の芸術祭のコンセプトを考えることでした。もう少し言うと「鹿野で芸術祭をするってどういうことなんだろう？」ということを考えました。僕はこれまでいろんな土地に住んできましたが、鹿野はとにかく風景が洗練されていて美しいんです。城下町だけでなくそのまわりの自然もどこを見てもすごくデザインされた景色がありました。こういう場所ってありそうで意外とない。つまりそれが鹿野の持っている強い特性だなと思いました。

新しく参加するアーティストがやってきてこの鹿野の中から好きな風景を選んで、そこに作品を作ったらどうだろう、と思いました。そこにはアーティストと風景の新しい出会いがあります。さらにアート作品が展示されることで、町の人や観客たちはそこに生まれた新しい風景に出会うことになります。つまり参加するアーティストも芸術祭を見るお客さんや町の人々も、新しい風景に出会い、その中を旅するように回って楽しむような芸術祭がいいなと思いました。

そこで芸術祭のタイトルを「Landscape Journey～未知の風景をつくる旅～」としました。アートを通じてアーティストとお客さんと町の人々が新しい風景に出会う、というこの年に思いついたコンセプトは今でも芸術祭の作品発表のベースとなって受け継がれています。

# 2018

## 鹿野芸術祭 02

作品を  
作る人

アーティスト 三谷さやか



### 風と光の部屋を作る

この年は確か最初に芸術祭の新しいコンセプトについて聞いたと思います。「鹿野のいろんな風景をまわって、自分の好きなところを見つけてそこで作品を作っていいよ」という話を聞いてすごくワクワクしました。それでまず芸術祭の方とっしょに鹿野の町を散歩したんです。校庭でハルジオンの花畑に出会ったり、溜池みたいな場所で小さな祠を見つけたり、次々やってくる風景との偶然の出会いみたいなものがすごく楽しかったことを覚えています。

そして私はあの場所に出会いました。そこはお堀の中の丘みたいなところにある小さな林です。お堀が見渡せて風が吹き抜けて木々の木陰がゆらゆら揺れていました。私はすぐに気に入って「ここにします」と言いました。

作品を作るとき私は「ここをみんながくつろげる部屋にしよう」と考えました。まず要らなくなった布団を丸く切って、藍で染めた丸いカバーに詰めた大きな水色クッションを作って林のまん中に敷きました。そこにみんなでゴロゴロしてもらおうと思ったんです。そして木と木の間を紐を結んで自分で染めた大きな布をかけていきました。それが壁のような仕切りになってクッションを中心とした部屋ができるというイメージです。壁になる布には藍の生葉をたたき染めたものがあって、藍の葉の形がそのまま布に残っているものもありました。それが実際に風に揺れてる木の葉っぱと重なってとても美しい風景を作り出していました。そのとき「私も草木や風や太陽とっしょにひとつの作品を作っている」という気持ちになったことを覚えています。

鹿野芸術祭はいつも私に自由に作らせてくれる場所を与えてくれました。何も気負うことなく遊んでいるみたいに心に浮かんだものを形にすること。その気持ちは今でも私が創作するとき大切にすることのひとつになっています。

### Profile

鳥取市出身

ESMOD JAPON 大阪校卒

アパレルパターンナーを経た後、菜食レストランで働く。

鳥取にUターン後、畑の植物やオーダー服を仕立てる際の残布を使って、

草木染めや刺繍などの手法で衣装やお守り・魔よけのようなオブジェを製作。ランダムに個展を開催。

# 2018 鹿野芸術祭 02

## Archive Data

開催日 2018年 10/5(金) 6(土) 7(日) 8(月祝)

### Artists & Works



三谷さやか「Light room from plants」

会場/西物見

お堀の見下ろせる小さな林に自ら染色した布を使って空間作品を制作。風と光を受けて美しく揺らめく布を壁に見立て、中心に円形の大きなクッションを置き誰でも寝転べるようにした。



原田恵「お雑煮」

会場/鹿野苑

「万物の礎はごちゃごちゃした多様性に満ちている」という考えを雑煮というモチーフで表現した。約90×60cmの大きな和紙の上に多色刷りの木版で制作されその美しい色彩が深く印象に残る作品。



wakruca「めざめの森/ねむりの海」

会場/しかの心 2F

鳥取で撮影した景色の上に図形をデザインし、自然音で作った音楽を重ねてそこから思い浮かぶ詩を作成。風景と音と言葉が不思議に融合するインスタレーション作品。



山本品大「空き家と雨と虫」

会場/加藤邸

城下町にある人の住まなくなった空き家を利用したインスタレーション作品。雨漏りのする廃屋に住む微生物や生き物からの視点に置き換えて生命の豊かさを表現した。



ニシオトミジ「輪廻シリーズより」

会場/鹿野往来交流館 童里夢 ホール

鳥取県出身の画家で2017年に惜しまれながら逝去されたニシオトミジ氏の作品を展示。輪廻シリーズを中心に生の根源、命の連鎖を深く見つめて追求した作品群は今も多くの人々を惹きつけている。



鹿野学園3年生+ひやまちさと「旅する船」

会場/鹿野往来交流館 童里夢 芝生

鹿野学園3年生の子どもたちひとりひとりが自分だけの「旅する船」を作成。ただ船を作るだけではなく「どんなものを運ぶのか」「どこに向かって行くのか」などそれぞれの船の物語も創作した。



藤田美希子「日本オオカミ/境界線」

会場/本田中家

今では絶滅してしまった日本オオカミを描いた絵を天井から糸で吊るしてあたかも目の前にいるかのような空間を演出。また鹿野の森林をモチーフに人間界と自然界の境界を描いた絵画作品も展示。



# 2019 鹿野芸術祭 03 鹿野芸術大茶会

この年の芸術祭は少し実験的な回となりました。  
これまではひとりのアーティストがひとつの作品を作るという形でしたが、  
今回はアーティストとフードなどの飲食を作る人がタッグを組んで  
作品を披露するという「チーム制」が採用されました。  
これによってアートと観客のみなさんの距離が近くなり、  
より気軽に身近に芸術を楽しんでいただくことができました。  
鹿野はもともと城下町ということもあって  
お寺でお茶を教えていたり昔ながらのお茶の文化が息づいています。  
そういった土地の風土ともマッチして  
たくさんの方に芸術祭を楽しんでいただくことができました。

芸術の入口を  
もっと広げてみる。



# 2019 鹿野芸術祭 03

芸術祭を  
作る人

芸術祭実行委員会 wakruca



## 企画から芸術祭を作ってみる

毎年、だいたい12月か1月くらいに次の年の芸術祭をどんなものにするか打ち合わせをするんですが、この年の会議はとて難航していました。もう4回目の芸術祭になるんでだんだん同じになってくるんですね。例えば新しいテーマを作ったり、中途半端に縛りを入れると参加アーティストの表現の幅を狭めるし、自由にやってくださいと何だか今までと同じになる。どうもこれだという決定的な何かがなく、こたつにあたりながらぼんやり空中を眺めていました。

ふと、去年の展示のあるシーンが思い浮かびました。三谷さやかさんが丘の上でさまざまな布を展示していた会場で、ゆらゆら揺れる布を見ながら「ここでお茶とかしたら楽しいよね」と話していたんです。そこであるアイデアが浮かびました。アーティストひとりの展示じゃなくて、アーティストとフードを作る人のチーム制にしてみたらどうだろうと。

アートって何だか敷居が高くて近寄り難い、という声をよく聞きます。高齢の方や普段馴染みのない方にとっては特にその傾向が強い。でも例えば「いっしょにお茶もできますのでどうですか？」とひと声かけるだけすごくその世界に入りやすくなる。それからチーム制にすることで作品から新しいメニューが生まれたり、またフードのアイデアから新しいアートが生まれたりするんじゃないかと思ったんです。そこでみんなで話し合いながらメインアーティストをひとり立てて、その方と合いそうなフード系の人を挙げてチームを組み、城山を舞台にして大きなお茶会をするという企画になりました。

この回は特におもしろい作品がたくさん生まれて印象深い年になりました。ひとつのアイデアで全体をディレクションして導けるんだという発見は僕にとっても貴重な経験になりました。

# 2019

## 鹿野芸術祭 03

作品を  
作る人

アーティスト 宮原翔太郎



### お堀に現れた水上茶室

確かはじめに声をかけてもらったときに「今年はアートとフードを合わせてチーム制で作品を作る」というお話を聞いたんだっただけかな。ちょうど僕は「令和建設」という会社で大工仕事をしながら「喫茶ミラクル」という飲食店も経営しているので今回はみんなでチームになって作ろうと考えました。

作品についての一番初めのイメージですが、鹿野は城下町なので大きなお堀があるじゃないですか。あそこに漠然と何かを浮かべたいと思ったんです。せつかくお堀があるんだからあそこをうまく活用できないかと。それで芸術祭のタイトルが「大茶会」だったんで素直に茶室を浮かべようということになりました。お堀に浮かぶ水上茶室。考えただけでワクワクしました。

まずお堀に大きなドラム缶を浮かべてその上に4〜5畳くらいの大きさの板場を作ってそこを茶室に見立てました。そして僕たちはダンボールでできた袷と帽子を身につけ、利休のコスプレをして客人をおもてなしすることにしました。まず客人は岸から木の橋を渡って茶室にやって来ます。そしてそこで鯉の餌を手渡され、餌まき用の空気砲にその餌を投入してお堀に向かって発射。おいしそうに餌を食べるお堀の鯉を眺めながら客人は提供された鯉コクを食べる、というのがこの水上茶室での儀式的流れです。

鹿野にはかつて鹿野城というお城があっただけであくまで想像ですが、このお堀でも季節の折々にお茶会のようなものが催されていたかもしれません。今回の作品はそういった鹿野の文化的な営みに対するひとつのオマージュとしてのパフォーマンスと言えるかもしれません。鹿野芸術祭にはいつも自由な表現をいっしょに楽しんでもらえるようなところがあって、今回もそういう雰囲気があったからこそ生まれた作品なんだと思います。

#### Profile

1990年東京生まれ香港育ち。

学生時代に文化人類学、空間デザインを学ぶ。

広島県尾道市でゲストハウスのセルフリノベーションプロジェクトに感銘を受け、東京でパーリー建築を始める。

現在は鳥取市気高町浜村に拠点を構え令和建設の共同代表として県内各地で建築を行う他、

「喫茶ミラクル」「hamavilla」「曇天野外」などの運営を行っている。



# 2019 鹿野芸術祭 03

## Archive Data

開催日 2019年 10/12(土) 13(日) 14(月)

### Artists & Works



「鹿野大絵巻」

鹿野学園3年生+藤田美希子+気高木工+光輪寺茶道部 会場/しかの心

鹿野学園3年生が鹿野の城下町を探検して自分だけの宝物を見つけてスケッチ。それを元にした絵と川柳を描きみんなで全長16mの大絵巻物を作成。会場の中心には巨大なシンボルツリー「しかののき」があり、そのまわりで抹茶と季節のお菓子が振る舞われた。



「不揺庵(ゆらがずあん)」

レイワ建設+喫茶ミラクル 会場/城山公園お堀

鹿野のお堀に櫓を浮かべて、その上からお堀の鯉たちに向かって餌をまくことができる装置を設置。来場者は櫓の上から餌をまき、それを食べる鯉を眺めながら特製の鯉コクを食べることができる。その一連の流れを茶道の作法に見立てそのパフォーマンスごとひとつのアートにした。



「guide」

プロ彩子+suncl 会場/城山 西の丸跡

「旅先で出会う印象的なシーンと旅人は見えない糸で結ばれていて導かれているのではないか」という考えのもとに城山の入口から中腹にある会場まで手でよった数十メートルもの糸を這わせた。会場の林の中では鹿野で採れた野草とハーブのブレンドティーやお菓子が楽しめる。



「未題」

岡山県立大学アーキチーム+岩瀬ゆか+shizuka gohan

会場/城山 六角堂前

城山を登る道の林の中にいくつもの白い布が垂れ下がり、それをキャンパスにしてアーティストがそこで得たインスピレーションを元に即興で絵を描き、時間とともに完成していくインスタレーション作品。会場では作品を眺めながら赤ワインとおつまみのプレートを楽しめるお店が開かれた。



# 2020-2022 3年のプロジェクトへ

芸術祭を  
作る人

芸術祭実行委員会 ひやまちさと



## Profile

鳥取市鹿野町出身

幼少期～高校生まで絵画教室で絵を描きながら

鹿野町民ミュージカルや、市民劇団、鳥の劇場(現)の中島諒氏が主催する高校生演劇に参加する。

高校卒業後、京都でデザインを学び、神戸でイラストレーションを学ぶ。

フリーランスのイラストレーターとして出版や広告などでお仕事しながら版画作品を制作し発表する。

2019年より鳥取県若桜町にギャラリーカフェふくを立ち上げ運営している。

## 土地に根ざした芸術

2020年から鹿野芸術祭は3年間をかけて作り上げていくスタイルに変更しました。ちょうどその年にコロナが始まったというのがありますが、実はコロナになる前からこの形は考えていたことでもあります。

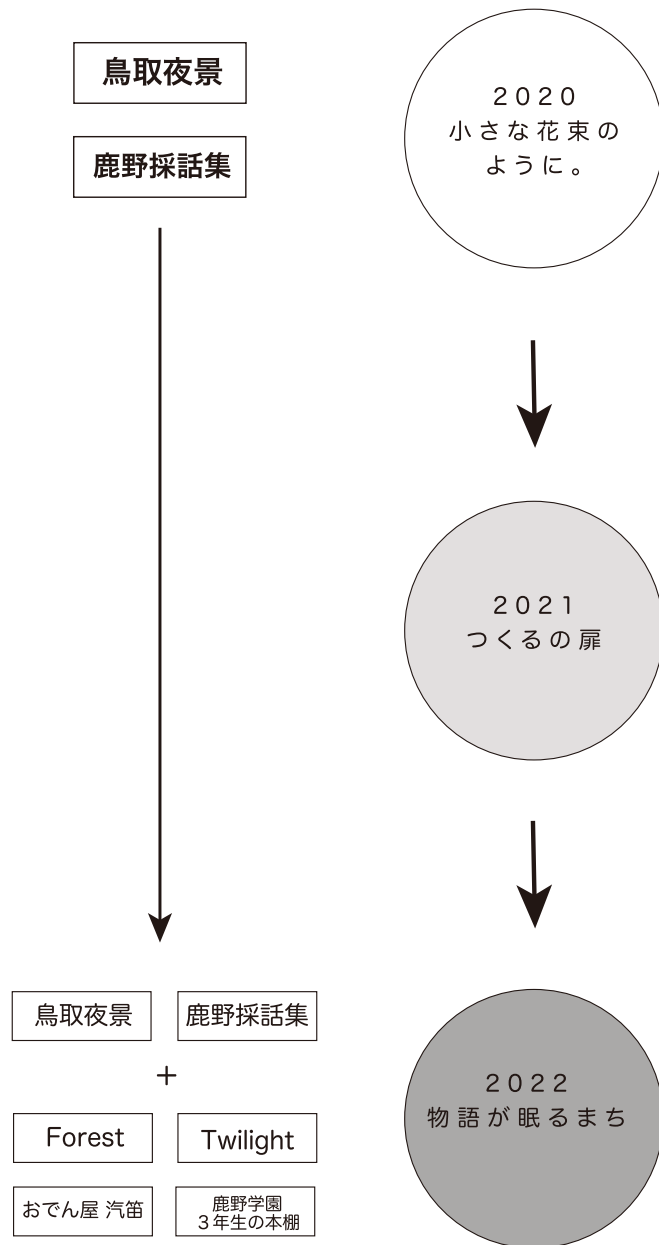
私が運営に携わったのが2018年でそれから毎年芸術祭を開催してきました。これはやってみてわかったことですが、一年というスパンで企画を考え、アーティストが入れ替わり、終わったらすぐに次のことを考え始めるという流れはどこか芸術祭がイベント的で簡単に消費されていくだけのようなものに感じられました。もっとアーティストが鹿野の暮らしを深く知り、人々の輪の中に入って作品のことを考え、この土地に根ざしたものを作ることができないだろうか。それは時代に逆行しているような気もするけど、ローカルな場所で暮らす自分たちらしい形なのではないかと考えるようになりました。

まずメインアーティストとして藤田美希子さんと山本晶大さんに声をかけました。このふたりは芸術祭の初期から関わってくれて鹿野という場所に馴染みもあるし、作品のコンセプトづくりや制作プロセスも含めて安心して任せられると思ったからです。三年という期間は一年目にリサーチ、二年目に制作、三年目に発表という風に展開することにしました。その上でふたりと話し合い、藤田さんは鳥取各地で夜景を描く「鳥取夜景」、山本さんは鹿野の人々からこの土地の話聞く「鹿野採話集」という形でスタートしました。

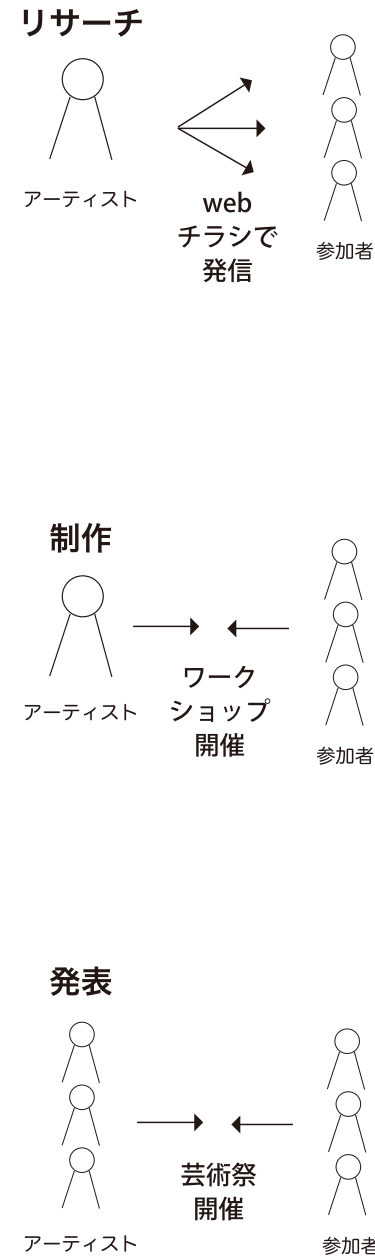
結果的にこのふたつのプロジェクトは少しずつ形を変えながら変化し鳥取や鹿野という土地に根ざしたとても深みのある作品として完成しました。最終年にはさらに3人のアーティストを加えて「鹿野芸術祭2022」という形での発表となりましたがどの作品もとてもクオリティが高く、これまでの集大成となるような芸術祭になりました。



## <プログラム内容>



## <プログラム展開>



## 3年間のプロジェクトをどう作るか

2020年から2022年まで、鹿野芸術祭はこれまでと違った新しい形での運営をスタートしました。ひとつはアーティストが鳥取や鹿野という土地を見つめて向き合い、しっかりと時間をとって作品制作を進めるため。そしてもうひとつはコロナ禍でも歩みを止めることなく芸術活動を進めていくためです。そこで私たちはふたりのメインアーティストを立て、一年目「リサーチ」→二年目「制作」→三年目「発表」として段階的に活動を進めていくことにしました。

2020年はコロナが広がり人の行き来もなかったためアーティストの活動内容を「芸術祭レター」という形で発信。鹿野町内の約1100世帯に毎月レターを配布し、合わせてwebでも情報発信を行いました。「小さな花束のように。」というタイトルのもと、読者のみなさんのひとりひとりの手元にアートと触れる時間が届くことをイメージしながら運営を進めました。

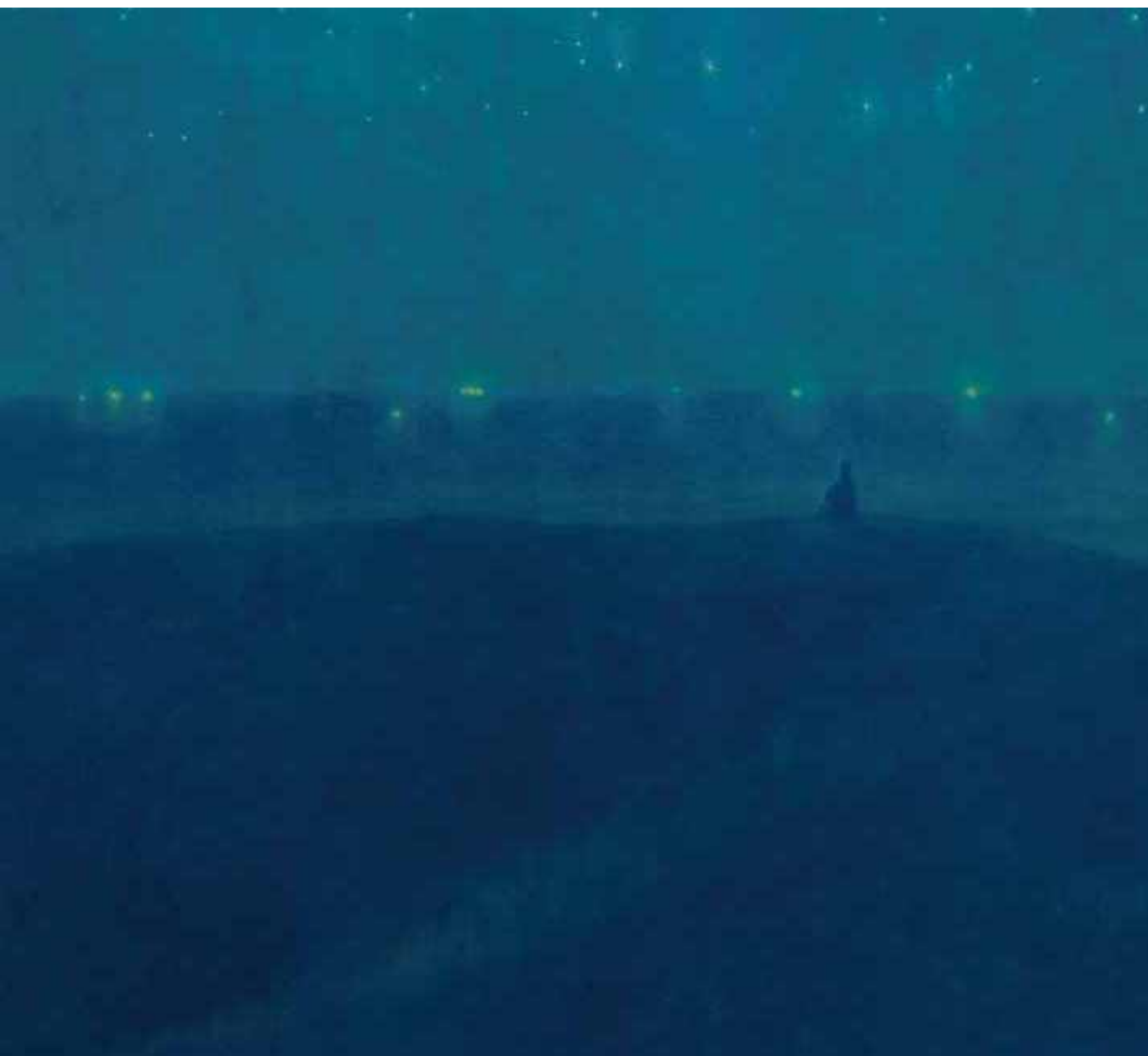
2021年になると徐々にコロナも落ち着いてきました。そこで「つくるの扉」というタイトルでアーティストは引き続き制作を進めながらワークショップを開催。人々との交流を少しずつ増やしながらか最終年に向けて着々と準備を進めていきました。

そして2022年は発表の年。メインアーティストのふたりの他にさらに3組のアーティストを加え、全6作品で芸術祭を開催。鹿野の城下町を舞台に3年ぶりに観客のみなさんを迎えて芸術祭を開催しました。県内外から多くの方々に来ていただき久しぶりに賑わいのある芸術祭が戻ってきました。「物語が眠るまち」というタイトルの通り各作品が深い物語性を持ち、城下町を巡りながら観客がそれぞれの世界観の中に引き込まれていくような完成度の高い芸術祭になったと思います。

2020

小さな花束のように。

## 鳥取夜景 / 藤田美希子



## 鳥取の夜を集めて描く

鳥取の夜景を描こうと思ったのは「鳥取には本物の夜がある」と思ったことがきっかけでした。私は千葉で生まれ育ちましたが、都市では夜になっても町にはたくさんの照明が灯され、常に誰かが起きて活動しています。だから私が鹿野に来たとき「夜の静けさ」がすごく印象に残りました。鹿野では町の人々も森の動物たちも空の星々も漆黒の闇の中で寝静まっています。そんな深い静謐は私の描く絵の世界にすごく近いと感じていました。だからこれをモチーフとしたシリーズを一度描いてみようと思ったんです。鳥取砂丘や鹿野のお堀やローカル線の駅。私が鳥取に来て好きになった夜の風景を集めていくような感覚で一枚一枚描いていきました。

2020年はコロナで芸術祭が開けなかったので、毎月一回「鹿野芸術祭レター」という印刷物を発行して、その表紙を「鳥取夜景」の発表の場所にしようということになりました。毎月一枚絵を描き続けるというのはけっこう大変でしたが、できあがってみると自分が鳥取の夜について感じたものを多角的に描くことができてすごく貴重な経験だったと思います。

絵を描いているうちにこの絵に物語をつけてみたいと思うようになりました。ひとつひとつの夜の景色の中に何か深い物語が眠っているような気がしたからです。ちょうど「鹿野芸術祭レター」の中面で鳥取夜景についての執筆をコピーライターのwakrucaさんをお願いしていました。wakrucaさんなら絵の背景も知っているし、彼の書く文章が絵の世界に合うような気もしました。来年はwakrucaさんに物語をお願いしよう。この絵たちからどんな物語が生まれるんだろう。そんなワクワクした気持ちを抱きながら鳥取夜景のシリーズを描き終わりました。



2020

小さな花束のように。

## 鹿野採話集 / 山本晶大



## 鹿野の話を集めて見えてきたもの

2020年にコロナが広がり始めた頃、僕は岡山の宇野という町に住んでいました。ちょうどその前年くらいに芸術祭の実行委員の方から三年後の作品発表に向けて制作をお願いしたいと依頼を受けたんです。コロナで鹿野に行くことはできないし、だったらリサーチも兼ねて鹿野に住んでいるいろんな人たちの声を聞いてみたいと思いました。おじいさんやおばあさんが語る昔の話や言い伝えの伝説でもいいですし、普通に現代の暮らしのことでもいいですし、鹿野に眠るいろんな話を採集して拾った話のその中に鹿野の新しい姿が見えてくるヒントがあるんじゃないかと考えたんです。そしてそこで聞いた話を文章にして月一回発行する「芸術祭レター」の紙面上で発表することになりました。そこで鹿野で穫れた実際の鹿の角を付けた「鹿のポスト」を何個か作ってこれを城下町の各所に設置してもらい、あとはウェブからもメールを募集して幅広くお便りを募ることになりました。

毎回、お便りを読んだり話を聞くたびに僕の鹿野の印象は変わっていきました。鹿野というと誰もが城下町を思い出しますし、僕もそれまで城下町のエリアしか知りませんでした。しかし鹿野は城下の他に鷲峰山の方に広がる河内の集落、海沿いの浜村との中間にある勝谷の集落という風に文化的にも異なるエリアがあり、お互いにつながって影響し合いながら存在していました。それぞれのエリアで多様な歴史が重ねられ、日々の暮らしが営まれていたのです。まるでそれまで見ていた平面的な地図の視野が広がって立体的になり解像度が上がったようなそんな気持ちになりました。このときはまだはっきりしていませんでしたが、なんとなく鹿野を俯瞰で捉えた作品を作れたらと考えるようになりました。



# 2021 つくるの扉

## 鳥取夜景 / 藤田美希子 + wakruca

## 絵から物語が生まれ本になる

この年は絵の物語を作ることから始まりました。すでに7枚の夜景の絵が完成していたので、まず一枚ずつの物語をwakrucaさんに書いてもらい、できあがると集合してお互いにそれを読んで話し合うということをしました。そして修正しながら書き直し、完成するとまた次の絵に行くというような感じです。

wakrucaさんは絵から発想した架空の物語を書いてきてくれました。絵の中には女の子がひとり描かれているのですが、その子が夜の世界の中でさまざまな出来事に出会います。現実と空想の間を行き来するような素敵なお話。これが私の描いた絵から生まれたと思うととても不思議な気持ちになりました。

この年の芸術祭は「つくるの扉」というテーマだったので、できあがった絵と物語で本を作るワークショップを開催することにしました。佐治にある和紙工房「かみんぐさじ」さんに相談に行き、因州和紙をベースにした本を手製本で作るワークショップを開くことにしました。物語を印刷した和紙を折って重ね、ひとつひとつのページに夜景の絵を貼っていき、最後にすべてのページをひと針ひと針糸を通して縫い合わせていきます。一年間かけて鳥取を巡って描いた夜景から物語が生まれ、その絵と物語がここでようやくひとつになる。参加者のみなさんの手の中で「鳥取夜景」という本が生まれていくのを見てるととても幸せな気持ちになりました。

コロナが少しずつ落ちつきはじめて、みんなで集まって何かを作るという時間を持つことがとてもありがたく感じたことを覚えています。それまでひとりひとりが自分の場所に閉じこもっていたのが、みんなが少しずつ外に出て風通しがよくなり緩やかに交流がはじまったような時期でした。



# 2021 つくるの扉

## 鹿野採話集 / 山本晶大



## 作品の輪郭を描いていく

2021年になるとコロナも少し落ち着いてきたので検査はちゃんとしながら年に数回鹿野を訪れつつ、これまでリモートで進めていたリサーチを現地でさらに深めていくことにしました。鹿野のさまざまな資料を調べたり人々の話を聞く中で、僕はだんだんと鹿野の歴史をまとめたドキュメンタリーのような映像作品を作ってみようと思うようになりました。

そこで僕が大切にしたのは「日常の風景を残す」ということです。地方の町に残っている写真などの資料というのは大体がお祭りなどの非日常な行事のときで、普通の暮らしの記録というのはなかなかないんです。だからナレーションベースで鹿野の歴史を語りつつ、映像は現在の鹿野の風景を伝えるものにして thought と思いました。そうすることで現在だけでなく未来の人々への価値ある映像資料になると考えました。

もうひとつ鹿野でリサーチを深めていく中で心に浮かんだのが「牛」というモチーフでした。牛はかつて日本では農業をする上でとても大切な労働力でした。鹿野でも昔は家の中で牛を飼い、家族の一員としていっしょに暮らしていたと聞きました。それがトラクターの普及などで暮らしの中から追いやられて、最終的には和牛という食肉として扱われるようになった。その存在が時代の変遷を象徴するものとして僕の心の中に残ったんです。そこで展示のときのアートのアイコンとして藁でできた牛を制作することにしました。藁の多くは鹿野の農家さんからいただいたものを使わせていただきました。

それからこの年は「鹿のポスト」を作るワークショップも開催しました。ほぼマンツーマンのポスト作りでしたが、参加者の方の細かなご要望にもお応えできてご満足いただけたようで僕もうれしかったです。



## 2022 鹿野芸術祭 物語が眠る町

コロナの時期を経て3年という時間をかけて準備してきた  
芸術祭もいよいよ発表の時を迎えました。

長い時間をかけた分、参加したアーティストひとりひとりが  
鳥取や鹿野という土地をじっくり深く見つめることができ、  
そこに眠る物語を高いクオリティで表現することができたの  
ではないかと思います。

そういう意味でこれまでの集大成となる回になりました。

鹿野町の人たちや観客のみなさんからも「質の高い芸術作品を  
身近な場所で見ることができてとてもよかった」という声をいただき  
アーティストや運営チーム、サポーターのみなさんも含めて携わった  
みんなが充実感で満たされた芸術祭となりました。

ひとつひとつの作品は、  
ひとりひとりが紡いだ物語だ。





## 鳥取夜景 / 藤田美希子 + wakruca

鳥取夜景は鳥取の夜景を描いた絵から物語が生まれ、さらにそれを本にするというアートプロジェクトです。一年目に絵を描き、二年目に物語を作って本にして、三年目にあたる今回の芸術祭の展示では「その本の中の世界を体験できる空間を作る」ということを目指しました。

会場は鹿野の城下町にある「クチュール・シカノ」というギャラリースペースです。まずギャラリー全体を暗室にし、壁に夜景の原画とその横にそれぞれの物語を拡大して貼りました。まるで本を開いて読みながら歩いているように作品を鑑賞していただけるようにしました。さらにその読み進んだ先には吹き抜けスペースがあり、ここに山から切ってきた本物の大木を数本立てて森を作りました。その森のまん中には小さな机があり、そこで本になった「鳥取夜景」を読めるという仕掛けを作りました。空間作りのコンセプトは「物語の森に迷い込む」。部屋の多くに行くほど深い物語の世界に入り込んで行く感覚になるような空間構成になっています。

また展示期間中に「夜の朗読会」を開催。刺繍造形アーティストのみたにさやかさんに来ていただき、会場の森の中で本の朗読をしていただきました。辺りも暗くなった夜の会場で彼女の柔らかく澄んだ声が広がり、お客さまひとりひとりが作品のイメージの中に浸っていくとても豊かな時間となりました。

鳥取の夜景を描くということから始まったこのプロジェクトは物語を生み、本になって最後には空間作品となりました。さまざまな人が参加しながらさまざまな物を生み出していった3年間。ひとりだけではできない多様な体験をできたことはとても貴重な時間だったと思いますし、この経験をこれからの自分たちの創作に生かすことができればと考えています。



## 牛をひく / 山本晶大

この作品は僕が3年間、鹿野の人々にさまざまな話を聞き、多くの資料を読みながらフィールドワークを重ねて製作した映像作品です。近世から現代まで続く鹿野の歴史を紐解きながら、鹿野の3つのエリア(鹿野、勝谷、小鷲川)の繋がりとその変遷を描きました。

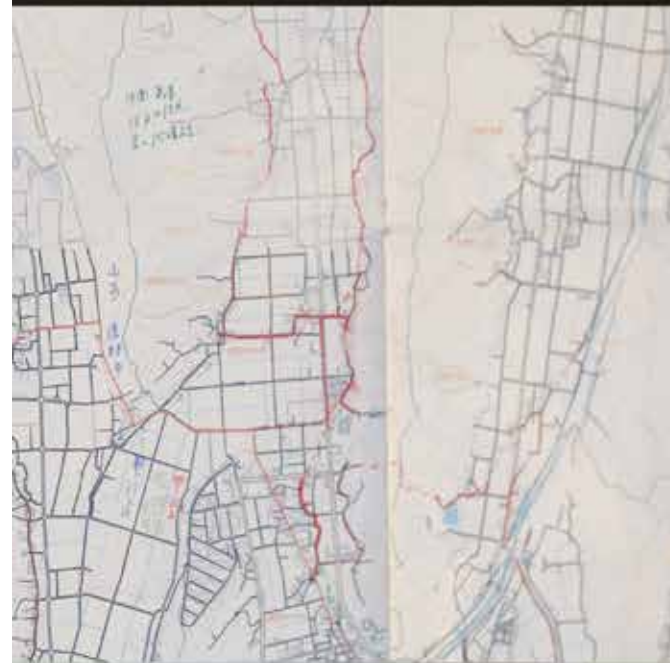
メイン会場の「しかの心」では大きなスクリーンで作品を上映し、また鹿野の歴史の移り変わりを象徴するアイコンとして藁でできた牛を展示。また「しかの心」の二階にある小部屋には僕がこれまで調べたさまざまな資料を置いて誰でも読めるようにしました。昔から鹿野に住む人にも、そして鹿野を知らないという方にもこの土地を深く知りその長い時間の経過に想いを馳せる機会になればと思いました。

さらに勝谷地区にある道の駅のビジョンでも同じ映像作品を流していただいたり、小鷲川エリアにある「里山BASE」で作品の上映会を開いたり今回描いた3つのエリアに展示を展開し、それぞれの地域の方にも楽しんでいただけるように工夫しました。「祖父母の言っていた鹿野町の出来事が歴史の一部として改めて理解できた」「学校などで流して子どもたちにも見てほしい」などさまざまな声をいただいてとてもうれしかったです。

近年はアートで地域を盛り上げるさまざまなイベントが行われていますが、鹿野芸術祭は単に外からたくさん人が来ればいいという視点ではなく、鹿野を見つめ、まず鹿野の町の人たちに楽しんでほしいという想いがこもった芸術祭だと感じます。町に暮らす人もやって来るアーティストも町の文化祭みたいな感じでみんなで楽しもうという雰囲気があるというか。だからこれだけ長く続いているのかなと思いますし、これからも鹿野という土地やここで暮らし人と深く結びつきながら続けていってほしいです。



作品の動画が  
ご覧いただけます





## Forest

藤田美希子

この作品は人間の心を描いた大絵巻絵画になります。2019年に鹿野で描きはじめ、鳥取、東京、ノルウェーで展示と制作を繰り返しながら描き進めてきました。10mある紙の両面に油絵で描かれ、表面は人の心を深い森に例えて描いています。天井から吊られた絵巻物に沿って鑑賞しながら心の森の奥深くに入り込んでいくことができる作品であり、裏面に広がる海は「人間全体の共通意識」を表しています。これを描きはじめたのはちょうど自分の心を見つめ直そうとしていた時期でした。絵巻の表面ができあがって裏面をどうしようかと思っていたときにある方から「自分の個を突き詰めると全体の意識と繋がる」という話を聞いたことがヒントになって裏面を描きはじめました。鑑賞する方が人間の心の奥深さについて見つめ直すきっかけになるような作品になればと思います。



## Twilight

青木幸太

今回の展示は写真と音楽による空間作品です。雨に濡れる樹々やみずみずしい新緑が映り込む水面など、鹿野の美しい風景を撮影してスライドで一枚一枚スクリーンに映し出しました。暗い部屋の中で次々に映し出されていく風景。そこに静かに流れるアンビエントミュージック。まるで架空のロードムービーを観ているようにこの作品の世界に入り込んでもらえれば思いました。普通の写真展は会場に写真が並んでいて何度も鑑賞できますが、この展示は作品である風景が現れては消えていきます。目の前から消えてしまうからこそずっと心に残っている残像。それはきっとひとりひとりの心の中にある原風景にも通じるところがあると思います。そういう儂いけれど誰もが大切にしているものを表現できればという思いで制作しました。

### Profile

青木 幸太 1993年生まれ、鳥取市出身。2019年に独立し、鳥取市を拠点に活動を開始。クライアントワークを手掛けながら、作家としても定期的に展覧会を開催。



## おでん屋 汽笛

宮原翔太郎＋喫茶ミラクル

僕たちは城下町に110年前からある架空のおでん屋を作りました。実はこのお店、中に入ると「もしも鹿野に駅が開通していたら」というもうひとつの鹿野の歴史をたどったパラレルワールドが広がっています。店内には実際には存在しない「鹿野駅」が描かれた地図や架空の時刻表が飾られ、おでん屋の店主は昔の駅の様子を語ってきます。その話に乗っかって架空の鹿野の昔話に花を咲かせることで時空を超えた経験を楽しめるというわけです。制作にあたっては鹿野町の人々に話を聞き資料を調べた上で、詳細な設定を作っておでん屋の店主役と綿密に打ち合わせしてリアリティを高めました。また細かなディスプレイにまでこだわり本当に110年前からあるようなお店づくりを心がけました。その土地の「架空の過去」を体感することで「現在」を深く見つめ感じることができるといえる実験的な作品となっています。



## 鹿野学園 三年生の本棚

鹿野学園三年生＋ひやまちさと

この年の鹿野学園三年生はみんなで本を作りました。まず全員で城下町や城山を散策して物語のヒントになるモノやイメージを収集。草木や小石を拾ったり原っぱで寝転んでみたりそれぞれのフィールドワークを楽しみました。教室に帰って「いつ、だれが、なにを、どうした」のキーワードを考えて物語を作成。「ひよこのびいちゃんが上町の新しい家でおやつを食べる」「白亜紀に気高木工が秘密基地を売る」など個性豊かな物語が次々に生まれました。次に木の板を二枚合わせた本を作ってそこに考えた物語を元にした絵を描いていきます。本から溢れんばかりのダイナミックな絵が描かれていき、この世に一冊しかない自分だけの本が完成しました。芸術祭当日はみんなの本を城山に作った本棚に展示。森の中に現れた楽しい図書館のようで子供たちもとてもうれしそうに鑑賞していました。

いつもお世話になっているみなさんから  
コメントをいただきました



## < 鹿野芸術祭 年表 >



### 小林清さん(いんしゅう鹿野まちづくり協議会)

鹿野芸術祭は多様な人々が関わって2016年から継続されている。宮内さん、藤田さんがやってみようと始め、ドイツから大谷さん・ヘマさん・リリーさんも参加。ひやまさんが中心となり更に面白くなっていく。印象に残っている作品も多い。江戸時代に建てられた本田中家に、当時生きてたような狼が出現した。よくわからない作品も含め、手作り感のある面白さが鹿野に新たな風を吹かせている。



### 岩竹佑貴さん(気高木工)

芸術祭を通じて普段見ない芸術に触れることでさまざまな刺激をもらっています。凝り固まった思考がほぐれて仕事にも柔軟な発想ができるようになりました。また僕は鹿野学園の授業にもよく参加するのですが、できた作品を見て「あの子がこんなこと考えてたのかー」と毎回面白い発見をたくさんしています。



### 長友芳樹さん(マンゴー農家)

2016年秋、鹿野に入り浸っていた大学生の僕は、何も考えず「芸術祭手伝って!」という“誰か”の言葉に2つ返事でOKしていた。それが始まりだった。芸術家の手伝いと聞いて壁に絵を掛けるだけだと思ってたが、想像を超えてきた。小さな城下町の芸術祭が回を重ね沢山の人の愛されるものになることを宮崎より願っています!



### 蔵多優美さん(デザイナー/コーディネーター)

2021-2022年をメインスタッフの1人としてご一緒させていただきました。運営サポートを並走することから始めてWEB制作や対話型鑑賞をさせていただくなど、鹿野芸術祭を緑の下から新しい風を吹かせるような動きをしていました。新参者でも受け入れてくれたのは運営チームや鹿野の皆さんの懐の深さがあるからこそだと感じています。これからの鹿野芸術祭もどんどんチャレンジしていく取り組みなのだと思います。今後も挑戦していきましょう!

- 2016 鹿野芸術祭 00  
鹿野町にて小林清さんの発案の元  
藤田美希子さんが芸術祭を始める
- 2017 鹿野芸術祭 01  
宮内博史さんが実行委員になる
- 2018 鹿野芸術祭 02 Landscape Journey ～未知の風景をつくる旅～  
実行委員にひやまちさとさん  
wakrucaさんが参加  
鹿野学園 表鷲科の授業でワークショップを開始
- 2019 鹿野芸術祭 03 鹿野芸術大茶会  
初の「チーム制」を導入
- 2020 鹿野芸術祭 2020 小さな花束のように。  
コロナ禍で三年計画のプログラムに変更
- 2021 鹿野芸術祭 2021 つくるの扉  
ワークショップを中心にプログラムを展開
- 2022 鹿野芸術祭 2022 物語が眠るまち  
三年ぶりに城下町で芸術祭を開催
- 2023 AIR SHIKANO スタート  
横浜から高久柊馬さんを招聘し  
三年計画のプログラムを開始
- 2024 AIR SHIKANO 2年目  
高久さんの制作の途中経過を発表し交流会も開催
- 2025 AIR SHIKANO 2025開催予定



# 暮らしと芸術。

鹿野の町は、ふとした美しさにあふれている。  
人々が丁寧に手をかけながら育てる城山の林。  
四季折々に新しい景色を見せてくれる畑の花々。  
軒先に飾られる色とりどりの風車。  
この町にはみんなで暮らしの美しさを守り育みながら  
過す日常が当たり前のようにある。

私たちの暮らしの中に自然とあって、  
人々の心を動かし豊かにする。  
そんな芸術と人との関係は作れないだろうか。  
この土地を訪れたアーティストが人々と語り  
触れあいながら作った作品が  
町の風景を変え人々の感性を刺激していく。  
「暮らし」と「芸術」がゆるやかに交流しながら  
お互いを育てていく新しいアートプロジェクトがスタートします。

鹿野という土地にどういう風景が生まれるのか、  
そしてここを訪れるアーティストの人生に  
どんな物語が生まれるのか。  
この新たな出会いの先にあるものを楽しみにしながら  
私たちはまた動きはじめます。

## そして新しい風景へ

3年間の準備を経て2022年の展示が終わり、ようやく肩の荷が降りた芸術祭実行委員会。ここで終わるといふ決断をしてもいいかなと考えていたとき、町の人たちからの声が届きます。「すごくいい展示だった」「またぜひ開催してほしい」その想いを受けて私たちは心を決めました。「よし、もう一回やろう」と。

そこで実行委員会は町の人々やサポーターさんから今年の芸術祭についてのヒアリングを行いました。さまざまな声上がる中に印象的な言葉がありました。「自分たちがいつも暮らしている生活の延長線上で芸術に出会えるのがうれしい」

昔ながらの城下の町並みが残る鹿野では、お堀に咲く桜を愛でたり、町の人々が集まって小さな風車を作って町中に飾ったり、生活の中に素朴な美しさが溶け込んでいます。「生活の延長線にある芸術」という町の人々の言葉は、私たちの芸術祭の活動もこの土地が長い時間をかけて積み重ねてきた文化の続きにある、ということに気づかせてくれました。そしてそれは自分たちがこれから活動していく意味が改めて明確になった瞬間でした。

まず芸術祭の中でスタートする新しいプログラム名を「AIR SHIKANO」に決定。「暮らしにつづく芸術。」というコンセプトのもと新しい活動が動き始めました。横浜からアーティストの高久柊馬さんを招聘し、3年計画でのプログラムを開始。高久さんは2023年から年に数回、鹿野で滞在制作をしながら2025年の発表へ向けて制作を進めています。

鹿野という小さな城下町にさまざまな人たちがやって来て、それぞれの想いを受け渡しながら紡がれていく新しい風景の中で、今度はどのような景色がこの町に現れるのか。私たち自身も楽しみにしながら、再び新たな風景に向かって歩みを進めたいと思います。

鹿野芸術祭実行委員会

